

新潟県支部報

私のフィールド

信濃川（越路町～長岡市）

高 綱 勉

私のフィールドは、信濃川上流の妙見堰付近から、下流は大河津分水可動堰あたりまでだが、最も頻繁に通う所は、蔵王橋を渡り信濃川の右岸から河川敷を通り、越路橋に至るコースだ。それを面積にすれば相当なものだが、車で脇見運転をしながら、堤防からころげ落ちそうになったり、穴にはまったりしながらも、探鳥を楽しんでいる。

冬は、積雪の具合で河川敷を通れない場合があるが、そんなときは“恋人”に会えず、沈んだ気持ちになる。そう、私の恋人はオジロワシ、翼をひろげれば、2m以上にもなる巨大なワシだが、信濃川という大河の中では、あまりにも小さい。12月の初旬頃に渡来し、3月の中旬頃に北へ帰るが、渡来当初は猟期中で落ち着きがなく、2月下旬頃から堂々とした風格をとりもどし、2羽一緒に行動していることが多くなる。越路橋と長生橋の間で暇そうにたずんでいる姿を、よく見かけるが、春の訪れを感じ、思いはもう北に飛び立っているかもしれない。

オジロワシが渡去する頃、カモ類も北を目指し、しばし翼を休めていく。越路橋上流に多く集まり、数百羽のトモエガモに出会ったこともあった。河川敷上空ではチョウゲンボウが飛び交い、また、交尾をしている。信越線の鉄橋で数つがい繁殖しているが1990年の繁殖時期に塗装工事が行なわれ、巣穴に利用していた部分がふさがれてしまい、今後の繁殖が危ぶまれる。

柳が芽吹き、その後ヨシが伸び始める頃、オオヨ

シキリが渡来する。長岡大橋下流西側の河川敷では、広大なクルミ林などがあり、これが信濃川の河川敷かと思われるほどの林で、クロツグミが歌い、アオジなどがたからかに囀っている。柳林では、ゴイサギやコサギなどが繁殖していたが、1990年は蔵王橋下流に移動してしまった。今年はどこにコロニーを作るのだろうか。そして蔵王橋下流の中州ではコアジサシがコロニーを作った。私は近年コアジサシのコロニーを探さないようにしている。その理由は、川という生きもののなかで、ひとたび大雨が降れば中州などは、たちまち水没してしまう。水位が上がり、飛べないヒナが高い所、高い所へと集まってくる。やがて小さな命は濁流の中に消えてゆく、それが自然の姿なのだと思います。その光景はもう二度と見たくない。梅雨時、大雨が降ると信濃川のどこかで、繁殖しているコアジサシが心配でならない。

やがて暑い夏が来る。囀りよりもアブラゼミの声が大きくなり、鳥の姿が見られなくなる。長生橋と大手大橋の間で行なわれる花火大会も終わり、秋のけはいが漂い始める頃、シギ、チドリの季節となる。長生橋上流西側の渋海川合流地点より上流に、わずかにばかりだが湿地のような所がある。アオアシシギ、コアオアシシギ、クサシギ、トウネン、ヒバリシギなどが渡来し、オグロシギやトキ科のクロツラヘラサギも観察されたと聞くが、何もいない日の方が多い。シギ類が南に渡りススキの穂が風にたなびく頃、また冬鳥の季節をむかえる。

巣箱架設による鳥の保護

研究部 小池重人

はじめに

自然環境の破壊で野鳥たちはしだいに減りつつある。しかしその原因は単純でない。そこで研究部では野鳥たちに営巣場所を提供するという面から保護活動を行なうことにした。また、巣箱架設は保護のためだけでなく、その後の調査で鳥たちのいろいろな生命を明らかにしていく楽しみもあるので、多くの人々にすすめたい活動である。以下に巣箱架設の意義と利用方法について述べた。これは樋口・小池（アニマ No. 206：巣箱の鳥類学）と小池・樋口（Strix 8：人工営巣場所の種類と架設効果）にあらたな知見を加えたものである。

巣箱架設の意義

最近、いろいろな規模で自然破壊がおこなわれ、鳥のすむ場所が減りつつある。そして当然のことながら鳥たちの数も減少している。この過程で鳥が減少する原因は、食物あるいは採食場所の有無にかかわる部分と、巣づくりする場所の有無にかかわる部分に分けて考える必要がある。たとえばカワセミは、食物となる魚はあっても巣をつくる土手がないために繁殖できない場合がある。コムクドリでは営巣場所がないために、繁殖期の後半になってもまだ繁殖せずにうろついているものがある。また薪炭林などの二次林で巣箱をかけてやると、今までいなかったシジュウカラがやってきて繁殖を始めることがある。このような例は、食物はあるが営巣場所がなく繁殖できずにいる鳥がかなりいることを示している。

森や林では、木々が次々に切られている。自然林では大規模な伐採以外に大木が選択的に切られ減少している。大木には樹洞が数多くあり、鳥たちの重要な営巣場所となっている。樹洞の減少は、そこで繁殖する鳥の減少

を意味している。今日、森林にすむ鳥の中で最も保護の必要性が高いのは、自然林にすみ樹洞で営巣する鳥だろう。したがってそうした鳥たちに、巣箱などの人工の営巣場所を提供することはきわめて重要である。ただしそれは、巣箱をかければ木を切ってもよいということではもちろんない。巣箱の提供は、若い林が成長して樹洞が十分にできるまでの過渡的な措置である。



図1. 中学生のかけた巣箱で
営巣したヤマガラ
(上川村 月山)

巣箱の架設は広く行われており、小中学校では教育の一環として巣箱かけがさかんである（図1）。日曜大工でも巣箱が作られ、身近な林によくかけられる。しかしそのような場合、森の中にはしばしば巣箱があふれるようにかけられている。かける環境、密度、利用される割合などは把握されていないことが多く、巣箱がどれだけ役にたっているのかはわからない。

この後、巣箱の架設をめぐるいろいろな問題を整理しながら、巣箱のよりよいかけ方を示していきたいと思う。

巣箱を利用する鳥

自然の樹洞に巣をつくったり、木や崖のくぼみに営巣する鳥は、人工的な巣穴あるいは巢台のある巣箱に巣をつくる傾向がある。日本ではこれまでに、23種の鳥が巣箱を利用して繁殖することがわかっている。オシドリ、シマフクロウ、コノハズク、アオバズク、フクロウ、ブッポウソウ、アリスイ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ（根津和育氏よりの私信）、カワガラス、アカヒゲ、キビタキ、キバシリ（森野 1989）、ハシブトラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、スズメ、ニュウナイスズメ、コムクドリ、ムクドリ、の23種である。このうちキセキレイとハクセキレイは、巢台と呼べる簡単なものを利用する。キビタキは前面が大きく開いたものにも、小さな穴があいたものにも入った記録がある。ほかに日本で樹洞を利用する鳥に、オオコノハズクやアカショウビンなどがいる。まだ巣箱を利用した記録はないが、適当な形状のものを用意すれば利用するかもしれない。

巣箱はどのくらいの割合で利用されるのか。いくつかの例を示してみよう。静岡県南伊豆町と東京都三宅島でシジュウカラ類を対象にして、毎年南伊豆で103個、三宅島で45個の巣箱を架設した例がある。この例では、毎年、南伊豆でシジュウカラが9～14個、ヤマガラが27～33個を利用し、三宅島ではシジュウカラ3～8個、ヤマガラが8～15個利用した。長野県の志賀教育研究施設ではシジュウカラ類用の巣箱を毎年110個架設し、ヒガラが毎年8～11個、シジュウカラが1～5個利用した。新潟県上川村ではシジュウカラ類用の巣箱を毎年26～28個架設し、シジュウカラが0～1個、ヤマガラが4～5個利用した。栃木県奥日光では、穴の直径3.5cmの巣箱をある年128個かけたところ、ヒガラが4個、シジュウカラが49個、ニュウナイスズメが8個、スズメが2個利用した。新潟市の海岸林では

直径4cmの巣箱を毎年66～100個かけたところ、コムクドリが22～45個利用した。

ただし、あとでのべるように、利用率はかける環境や架設数によって大きく変化するので、利用率を検討するためにはそうした条件をも考慮する必要がある。

巣穴の大きさと巣箱の形状

ここで巣穴の大きさというのは、巣箱の中の広さでなく、出入口の幅のことである。表1に示した数値は、各種の巣穴の大きさの目安で、その種が入れるあるいは好む大きさを示してある。シジュウカラの巣穴が2.7cmと中途半端なのは2.9にするとスズメに入れられ占領されてしまうからである（愛鳥センターに架設した巣箱では巣穴の直径が2.8cmでもスズメが利用した—石井哲夫氏私信）。ヒガラについてはもっと小さいものでもよいと思われるが、きちんとした記録がないのではっきりしない。もちろん同じ種でも、地域によって体の大きさが異なる場合があるので、実際にそれぞれの地域でいくつか異なる大き

表1 各種の巣箱の大きさ (単位cm)

種 名	巣穴(円形)の直径	底板から巣穴までの深さ	板の幅
ヒガラ	2.6	15	15
シジュウカラ	2.7	15	15
ヤマガラ	2.8	15	15
キビタカ	6.0	5	15
アカヒゲ	4.0	15	15
スズメ	3.2	18	18
ニュウナイスズメ	3.2	18	18
コムクドリ	4.0	18	18
ムクドリ	5.5	18	18
ブッポウソウ	9～10	20	25
フクロウ	20.0	40	40
コノハズク	6.0	18	18
オシドリ	12.0	25	30

〔樋口・小池(1989)より改変〕

さの巣穴をつくって実験してみるのがよい。ブッポウソウやフクロウ類については、くわしい資料がないので、ぎりぎりどの大きさで十分なのかははっきりしない。キビタキについては、キツツキにあげられた巣箱に巣をつけた例から推定したが、むしろ前が広く開いた巣箱のほうがよいかもしれない。同じことはアカヒゲにもあてはまる。コノハズクについては、ムクドリ用の巣箱を利用した例や、リスにかじられて巣穴が大きくなったコムクドリ用巣箱の利用例から推定した。

巣箱の形は、さまざまなものが考えられている。最も一般的なものは片屋根型と呼ばれるもので作るのも簡単である。両屋根型もよく作られるが、屋根の製作に手間がかかる。両型の形の違いは鳥にとっては問題ないようだ。同じ片屋根型でも、前面の入口が円や角ではなく、広く開いたキビタキ用のようなものがある。これは樹洞の代わりというよりは、むしろくぼみの代わりといえる。外国では、下へいくにつれて狭くなっている巣箱も考えられている。これは巣材が少なくてすみ、親鳥の仕事を軽減できるので、コケが少ない地域でシジュウカラが営巣するときなどに効果があるかもしれない。また、この型のものは、巣材の中で増える寄生虫の被害を軽減させるのにも効果があるらしい。

巣穴の入口から底までの深さも重要である(表1参照)。たとえば、あまり浅いとシジュウカラは利用しないし、逆に深すぎるとキビタキは好まない。スズメは枯れ草で中に筒状の巣をつくるので、ある程度の深さがあったほうがよい。巣箱の中の広さは材料の板の幅によるが、シジュウカラ類やキビタキは体が小さいので15cmくらいがよいと思われる。あまり大きいと、鳥たちが巣材を運び入れるのに苦労する。ムクドリやコムクドリでは、ヒナが大きいのので18cmは必要である(図2)。大型の鳥はやはりそれなりの大きさが必要である。



図2. 大きめの巣箱で育雛するムクドリ

どんな環境にかけるか

静岡県南伊豆町と東京都三宅島で、シジュウカラ類を対象に異なるタイプの林に巣箱を架設したところ、大部分のシジュウカラは明るい林内にある巣箱に営巣し、ヤマガラは照葉樹林内の巣箱をよく利用した。南伊豆の二次林、未発達な照葉樹林および三宅島の二次林では、この二種とも繁殖したつがいのほとんどすべてが巣箱を利用した。一方、三宅島のよく発達した照葉樹林では、そこで繁殖するヤマガラの二分の一～三分の一のものしか巣箱を利用しなかった。また巣箱を架設した地域の繁殖密度は、三宅島の照葉樹林に生息するヤマガラでだけ、架設していない地域のそれより高くなかった。これらのことから、シジュウカラやヤマガラの場合、巣箱の架設は営巣場所となる樹洞が多くあるよく発達した林内で行なうよりも、二次林や未発達な林を対象にして行なったほうがよいことがわかる。

コムクドリは本州中部以北でしか繁殖せず、今までこの種の巣箱利用例は少なかった。しかし、新潟市青山で1978年の3月に、前年繁殖していなかった広葉樹と松林の混交林に巣箱を46個かけたところ。翌年、14つがい

が繁殖した。このように、鳥がいない場所でも巣箱をかけることによって、多くが飛来し繁殖を始めることもある。今までまったくいなかった場所に巣箱をかけたら繁殖したということは、採食場所が利用されないまま残っていたことを意味している。

巣箱をかける間隔

コムクドリは巣の付近だけを防衛し、特に広いなわばりをかまえない。そのため、ある程度密集させても巣箱を利用する。新潟市の西海岸公園では、1978年に10m間隔で直線状に20個の巣箱を200mの範囲にかけた。そのときの巣箱利用数は8個であった。翌年20m間隔に50個をかけたが、最もよく利用した範囲を200mとってみると、10個のうち9個が利用されていた。新潟市本所の0.5ha(70×70m)の調査区では、14個の巣箱が毎年11～13個利用されている。ただしこの場合、あとで飛来したものは、しばしば近くの先住者に追い払われるので、空いた巣箱を獲得できたとしても、繁殖開始が遅れることになる。繁殖の遅れは繁殖成功率に多少影響するので、争いをさけさせるために巣箱はもう少し離れたほうがよいようだ。

シジュウカラ類はコムクドリと違って広いなわばりをもつので、狭い範囲内に巣箱を集中させても意味がない。シジュウカラでは1haほどの広さが、ヤマガラでは2～4haほどの広さがなわばりとして必要なので、コムクドリの例のように0.5haの中に14個もかけても、1～2個しか利用されないだろう。広いなわばりをもつ種では、ひとつのなわばりの中にせいぜい3～4個の割合でかけて、できるだけ広い範囲に分散させたほうがよいようだ。

巣箱の新旧とかける時期

八ヶ岳山麓の清里は、標高約1400mの地域である。1983年5月にそこに巣箱を10個架設した。架設した10個の巣箱のうち、利用されたのは5個であった。5個のうち3個はヒガ

ラが、2個はシジュウカラが利用した。ヒガラは架設後すぐに巣材を運び込み、7～8日後に初卵を産んだ。このことから、繁殖に必要な樹洞は不足していると考えられた。1984年4月には新たに30個を加え、合計40個架設した。そのうちシジュウカラが14個、ヒガラが2個、計16個利用された。前年に架設した10個の巣箱は、巣材が少し運ばれたものが2個、産卵途中に放棄したものが1個あっただけだった。一方、同じ林内の新しい巣箱は10個のうち5個が利用されたので、シジュウカラやヒガラは新しい巣箱を好む傾向があるのかもしれない。

しかし、標高の低い地域や暖地では、むしろ古い巣箱を選ぶ傾向があるらしい。特に繁殖期直前にかけた巣箱には、あまり入らないようである。これは次のような理由によると思われる。標高の低い地域では、カラ類は定住性が強い。定住個体の多くは冬に過ごした場所で繁殖するし、樹洞を冬のねぐらにも使用する。そのため、樹洞にはいつも興味をもって生活しており、冬によく晴れた暖かい日などには、営巣場所を選ぶような行動が観察される。このため春のはじめには、すでに営巣場所が決まっているつがいも多いらしい。したがってこのような定住個体は、春の繁殖期直前に巣箱をかけても入らずに、古くからある巣箱や樹洞に巣づくりするのだろう。一方、標高の高い地域あるいは冬に雪におおわれる地域では、鳥たちは冬に漂行して遠方に移動してしまう。このような鳥は、繁殖期直前に戻ってきたとき、新しくて中がきれいな巣箱を好むのではないかと思われる。

この傾向は、同じムクドリ科のコムクドリとムクドリを比較しても示すことができる。留鳥個体の多いムクドリは、二月頃から、暖かい日にはときおり軒下の巣穴をつがいで訪れ始める。おそらくそのため、繁殖期直前にかけた巣箱を利用することはまれである。一方コムクドリは、渡来してから巣箱をかけ

でもそれを利用する。この場合、新しく作った中がきれいな巣箱が選ばれる傾向がある(図3)。ムクドリ類の巣にはダニなどの寄生虫が発生することが多いので、古くて寄生虫がいる可能性のある巣箱は敬遠するのだろう。

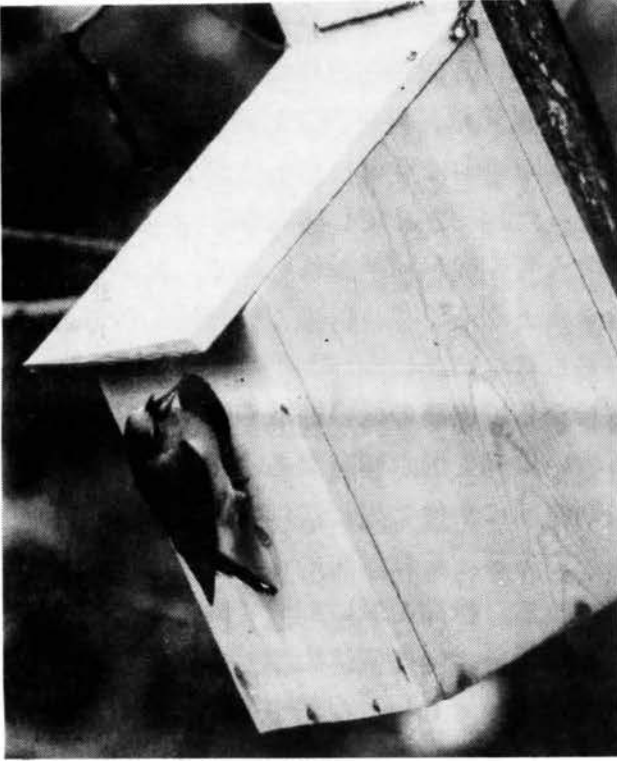


図3. 新しい巣箱にやってきた
コムクドリの雌

このようなことから、留鳥に対しては、巣箱は秋にかけたほうがよいだろう。利用された巣箱は、秋のうちにきれいに掃除しておいたほうがよい。可能なら、鳥に害がないピレスロイド系(除虫菊)の殺虫剤で消毒しておこう(大正製薬のダニスプレーが無臭で最も適している)。また早春にはもう一度、中を点検したほうがよい。冬の間にネズミやヤマネなどが、枯れ葉を入れていることがあるからである。一方、夏鳥用の巣箱は、秋にはずして渡来直前にかけ直したほうが、巣箱もいたまないし、ほかの種類が使うこともないので都合がよいだろう。冬季、コムクドリ用の巣箱は、アオゲラやアカゲラのねぐらとして使われ、大きな穴をあけられることがある。そのままにしておくと、繁殖期になってムクドリが利用してしまう。

巣箱のかけ方

ふつう巣箱は木にかけるが、種によってはそれ以外の場所にかけることにもなる。たとえば、カワガラスは木にかけても入らず、橋の下などにかけなければ利用しないだろう。木にかける場合、人通りが多い道沿いでは、道から少し離れた茂みにかけたほうが、鳥も安心して利用すると思われる。たとえば、コムクドリでは人通りが多い場所では、育雛期に警戒しすぎて巣立ち率がよくないことがわかっている。人のいたずらを防ぐには、はしごを使って高い場所にかけるしかない。1.5～1.8mのおりたたみはしごを使うと2.5～4mほどの高さのところにかけることができる。捕食者からの被害を避けるためにも、高くかけるのには意味があるだろう。けれども、高い場所でも時々捕食される。人家に近いときには猫の被害にあう。猫は高い木にも登り、巣穴の前に横枝があるとそこに上がり、巣穴の中に前足をを入れてひっかきまわす。ヘビやイタチやネズミによる被害も多く、イタチの場合は食べなくても殺してしまう。これらの被害を防ぐ対策として、滑りやすい塩ビ性パイプの杭を立て、その上に巣箱をつける方法がある。しかし杭をたてるという作業は大変なので、木の幹に円盤状に有刺鉄線を張り巡らしたり、笠状のものをとりつけたりして外敵が登れないようにしてもよい。

巣箱の取り付けには、幹を傷つけないシュロ縄を使うのがよい。強風が当たりやすい場所なら、その向きに巣穴を向けるのはよくないだろう。傾いた木にかける場合、巣穴は下向きになるようにすべきである。そうでないと、雨が巣箱に簡単に入ってしまう。かける木が傾いていると、雨水が木の傾いた方向に集中して流れてきて、屋根のすきまから巢内に流れ込むおそれがある。このような場合には、背板上部と幹の間に細い板などを取りつけて、すきまを空けるようにしたほうがよい。

かないと、あとで縮んでひび割れの原因になったり、あけておいた穴の幅が小さくなりすぎたりする。

組み立てはまず、背板の下の方から約1cm上に、板に垂直に線を引く。それに合わせて横板を中に入るように打ちつける。両側を取りつけたら、底板の部分を底の中の幅に合わせて長方形に切りとる。そして横板の内側に入れ、打ちつける。底を内側に入れないで下側に取り付けると、釘がさびるとすぐに落ちてしまう。次に前板を打ちつける。底のまわりは、それぞれの面に三本は釘を打っておいたほうがよい。仕上げは屋根である。屋根は蝶つがいできりつける。鉄製の蝶つがいはさびやすく長もちしないので、ステンレス製またはしんちゅう製のものを使うのが望ましい。屋根は簡単にあいてしまわないように、金具でとめられるようにしておくのがよい。

今後の活動

現在研究部ではヤマガラ、シジュウカラ、コムドリ、ムクドリ、キビタキの巣箱を架けてどんな架設方法がよいか調査中である。今後はフクロウ類やブッポウソウなどについても架設調査を行ないたいと考えている。いまのところ数人の会員の方から協力していただいているがまだまだ人手不足である。もし協力していただけるなら連絡していただきたい。また個人的に巣箱を架けてなにかおもしろい観察をされた方は教えていただきたい。今後必要に応じ、巣箱架設と調査方法の講習会なども開く予定である。

〈参考文献〉

樋口広芳・小池重人, 1989, 巣箱の鳥類学, アニマ

No.206:74-77.

小池重人・樋口広芳, 1989, 人工営巣場所の種類と架設効果, Strix 8:1-34

森野正弘, 1989, 巣箱で営巣したキバシリ,

Strix 8:288-289,

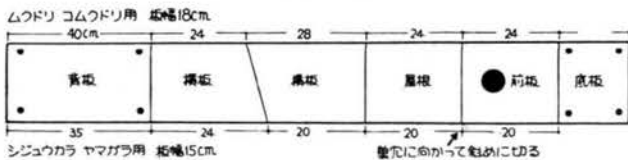
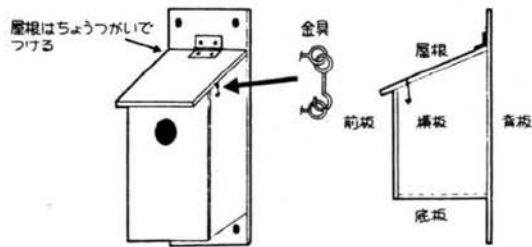


図4. 片屋根型巣箱の見取図

〔樋口・小池(1989)より〕

巣箱の作り方

最後に巣箱の作り方を述べておこう。巣箱に使う板はスギが固くて腐りにくく最も適している。板の厚さは、小鳥用の場合1.5cmが適当である。片屋根型と両屋根型で作り方に多少の違いがあるが、ここでは片屋根型を作る手順を記しておく(図4)。材料の板の端は巣箱の背板にするとよい。横板はふたつ並べて屋根の傾斜をつけるように切りとる。前板は屋根につづけて寸法をとる。前板と屋根の間は、屋根の傾斜の角度に合わせて前板方向に斜めに切る。屋根はこの切り口が背板側になる。前板はこの切り口が上部なので、巣穴はそれを見越してあけなければいけない。底板は切り取らないで残しておき、組み立てる段階で長さを決めて切りとる。背板の上と下には取りつけるための紐を通すので、0.5cm～1cmくらいの穴を二つずつドリルであけておく、底板は適当な場所に四つくらい、0.5cm～1cmくらいの穴をドリルであけておくか、四隅を切っておく。板はよく乾燥させてお

〈猛禽類シリーズⅧ〉

チュウヒ

風間辰夫

本種はヨーロッパ、アフリカ、アジア、インド洋諸島、ミクロネシア、オーストラリアなどに分布し、日本へは冬鳥として渡来する。

しかし昭和57年頃から、愛知県の弥富野鳥園、石川県の河北潟、秋田県の八郎潟、北海道の涛沸湖等で繁殖しており、特に弥富野鳥園では昭和57年から平成2年まで毎年繁殖しており、毎年二巢の合計が6羽となっている。

- ・県内の生息場所：福島潟、鳥屋野潟、佐潟、柏崎、佐渡郡等に冬期渡来している。

福島潟では5～6月にも観察しており、繁殖している可能性もあると思う。

生息場所は年間を通して広いあし原のある水辺であるため、大きな湖沼が必要となってくるわけで、あし原を中心に生息するワシ、タカ類は本種だけである。ハイロチュウヒという別種もいるが、これはかなり山間部にも生息している。またチュウヒワシという種もいるが、これはトビ位の大きさであるが、チュウヒとはちがい山岳地帯に生息している。

- ・繁殖年令：これまでふ化後3～4年たないと繁殖しないといわれてきたが、石川県の河北潟で個体識別調査をしたところ、ふ化した翌春に繁殖したのを確認した。

- ・注・鳥の繁殖年令はこれまで、何種は何年とか、繁殖年令について色々論議されてきたが、個体識別調査、人工飼育等で具体的な研究の結果、個体差があり、同種であっても1年で繁殖する個体もあれば2、3年の個体もあるわけで、これは人間が15才で母親になる人もいれば色々ある点から、鳥獣でも同じことがいえると思う。

- ・食性：水辺に生息しているので、当然その



写真提供

古川 弘

高田平野北部で

〔'89年9月〕

周辺にいるヘビ類、カエル類、モグラ類、ネズミ類、淡水魚も食べるほか小鳥類も若干食べる。人工的に飼育した場合は主として鶏肉であり、たまにフナなどの淡水魚を与えるといい。

- ・育すう状態：弥富野鳥園で9年間繁殖状況を観察された吉村信紀さんのお話では、あし原の地上に営巣し卵は3～6個位産み、生れたヒナは“エサ”があれば大体巣立ちできるとのことであるが、エサが不足したり、二番営巣し、片方の親がエサを与えなくなった場合（害敵などに殺傷された場合等）にはその巣のヒナを全部親のいる方へ移すとその巣の親がヒナを育てるが、エサが不足するので、その場合人工的に人がエサを与え、親鳥と人間が協力して子育てにあたるというほほえましい姿である。多いときは一巢で8羽も育てたこともあったといわれている。
- ・注・先進国では、ワシタカ類が巣でふ化した場合、けんかその他で1羽しか育たないと見たら、すぐ親鳥から2羽の場合は1羽、3羽の場合は1～2羽をはなして人工的飼育し（大体20日間位）、またもとの巣へ戻す方法を行政マンが実施している。
- ・鳥類保護の意義の再認識：殺すな、捕るな飼育するな等だけが保護ではなく、生態を十分研究し、ヒナを育てたりする時の手助けも大切な保護である。アメリカ、イギリスでは傷病鳥で自然復帰できなくなった個体を種鳥として、卵を産ませ、ヒナを育て自然へ帰すことを重要課題としている。

——野外鳥類学講座に参加して—— 末 崎 朗

'90年春と秋、前後期に分けて、日本野鳥の会研究センターの主催で野外鳥類学講座が開催されました。「野鳥」誌の参加者募集を見てご存知の方も多いと思いますが、その目的は野鳥観察を単なる趣味として終わらせずに、多くの人に環境保全の基礎となる調査・研究を進めてもらうために、必要な知識や技術を学ぶ機会を提供しようというものでした。私はこの講座に参加しましたので、その概要と感想を述べたいと思います。

前期の講座は5月18日から22日までの5日間、長野県の戸隠高原、戸隠森林植物園を主なフィールドとして行われました。参加者は九州から東北地方までの26人で、年齢も20代から70代まで、女性の参加者も多く、まさに老若男女、様々な経験の方々が参加する講座となりました。講座は、午後に講師の先生方の講義があり、翌日の午前中に講義内容に伴った実習を行うという形式で進行されました。前期の講師の先生方と講義内容は次の通り。樋口広芳先生（野鳥の会研究センター）「野外鳥類学とは」、中村浩志先生（信州大学教育学部）「鳥の繁殖生態」、由井正敏先生（森林総合研究所東北支所）「森林環境と野鳥の相互関係」、大庭照代先生（千葉県立中央博物館）「鳥の音声通信」。講義内容は多岐にわたり、多くの事を学ぶことができましたが、その一つ一つをここで述べる事はできないので、主に実習について述べたいと思います。

あいにく天気の不都合などで、実習を実際に行ったのは、由井先生と大庭先生のみとなりました。実習は朝4時起床で、私はかなり眠かったのですが、他の参加者の実習に取り組む意欲はすごく、私一人遅れるわけにはいきませんでした。由井先生の実習では、テリトリーマッピング法による鳥の個体数把握及び森林環境との関係の調査を行いました。大庭先生の実習では、ある一種の鳥の声のタイプ

分けと、それがどんな意味をもつのか考察する実習でした。どちらの実習も個人ではなかなかできない内容で、鳥の行動や生活について認識を深めることができました。またこれらの実習とは別に個人ごとの自由研究及び発表というカリキュラムがあり、私は「森林性鳥類の階層別利用状況」という少し大それたテーマで行いました。実習のフィールドとなった戸隠森林植物園は、ほとんど平坦であるにもかかわらず、鳥の種類が非常に多く、その住み分けを調べるのが面白いと思ったからです。憂うつだった発表もなんとか終わり、参加者全員が後期での再会を約束して別れました。

後期の講座は11月21日から25日まで、東京都の大井野鳥公園で行われました。後期の講師と講座内容は次のとおりでした。樋口広芳先生「環境選択と採食習性」、浜口哲一先生（平塚市博物館）「鳥の分布と環境変化」、上田恵介先生（立教大学一般教育部）「鳥の行動と社会」、金井裕先生（野鳥の会研究センター）「鳥類生息環境の保護と管理」。後期の講座の進め方も前期とほぼ同様で、個人別の自由研究もありました。講義、実習ともに前期から通してもバラエティに富んでいました。自由研究の発表では、前期に比べて発表内容の充実が見られ、参加者全体のレベルアップが感じられました。

前後期を通しての参加費が7万円ということで、最初は非常に高く感じましたが、計8泊10日で、日本で一流の先生方の講義が受けられ、全国に友人ができたことから今では決して高くないと思っています。この講座を受けて一番感じたのは、調査、研究というのは決して難しいことではなく、どんなささいな事でも疑問に思ったら調べてみようと思うこと、それに調査の方法が分かれば、誰にもできるということです。会員の皆さんも来年度以降のこの講座に参加して、調査研究を始めることをぜひお勧めします。

◇ 特集——私の好きな鳥・思い出の鳥 ◇

カモメたち

新潟市 熊本高志

私の好きな鳥はカモメの仲間（チドリ目のカモメ科とトウゾクカモメ科の鳥）である。

私の自宅からもっとも近いフィールドである鳥屋野潟と阿賀野川河口では、ユリカモメ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、コアジサシ及びアジサシの8種をこれまでに観察することができた。フィールドへは毎月少なくとも1回は出かけることにしている。ウミネコやユリカモメは毎回出会う鳥といってもいいので、会わなかったりすると「今日はどうしたんだろう」とさびしい気持ちになる。反対に期待していなかった鳥に出会うと感激してしまうものである。忘れもしない3月21日春分の日にはそれほど期待感もなく阿賀野川河口へ出かけてみると砂州に休息しているカモメ類がいた。望遠鏡で1羽ずつ確認していくとウミネコの他にセグロカモメがいた。それだけでもうれしく思うのに、なんとそれよりも大きく全体が白っぽい鳥がいた。シロカモメの幼鳥だ。思わず「おーっ」と声が出てしまった。

私のフィールドの中でまだ出会っていないけれど、出会う可能性のある鳥を新潟県鳥獣図鑑（新潟日報事業社）を調べてみると、ワシカモメ、ミツユビカモメ及びトウゾクカモメの3種であった。いつの日か私のフィールドの中で出会えるものと期待してせつせとフィールドに出かけてゆくのであるが、その前に予習という名目で他の探鳥地に出かけて観察してきた。ワシカモメは2月に北海道の羅臼で、ミツユビカモメとトウゾクカモメは7月にサハリンのオハで観察した。

その他のカモメ類は県内で観察できる可能性はきわめて低い。そこで私はいろんなカモメを求めて探鳥旅行に出かけた。これからも出かけるつもりであるが、これまでの中で思い出に残る鳥は4月にポナペで観察したエリグロアジサシと7月にサハリンのオハで観察したコシジロアジサシである。これらは白と黒の2色だけでなぜあんなに美しいのだろうか。姿・形がスマートであり、エレガントである。造物主の傑作といってもいいだろう。もし機会があれば、もう一度観察したい鳥である。

コマドリ

新潟市 佐藤 弘

子供達がまだ幼かった頃に、どの子が一番可愛いかと戯れに母に聞かれ、みんな等しく可愛いと、率直に、しかしこの場合答えにならない答えを返した事があります。

さて、もしも人気投票をするから好きな鳥を10種選べと言われたら、10票全部をコマドリに投じるインチキをやりかねないくらいに、私はコマドリにぞっこん参っています。

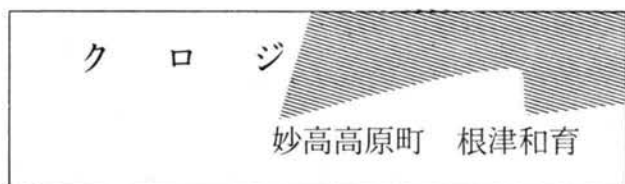
他の、声よし姿よしの鳥から、私の不正投票に苦情が寄せられそうですが、私がただコマドリを選ぶのは、あの鳴き声に清涼感と他の鳥声にはない品格を感じるからです。あの声が勇壮な駒のいななきに似ていることも合わせて、武家が好んだと言われるのもうなずけます。しかし、これは感性の問題ですから、あの鳴き声のどこにと聞かれたら、ひと晩かけてもボトルが空になっても、うまく説明できそうにありません。

春の渡りに、市内の青山保安林でその声を聞くことがありますが、まだどこか力なく、それに雰囲気もコマドリに似つかわしくはあ

りません。物売りのスピーカーの声や、ヘリコプターの爆音が聞こえてくるのですから台なしです。やはり、然るべき所へ出向くしかないようです。

あえぎあえぎ、空気の薄さを感じながら高度をかせぎ、そろそろへたばり始める頃遠くに聞き駒のいななき、立ち止まれば沢筋から吹き上げる涼風。とくれば、万事安上がりになっていく私には至福の時です。時には、カラカラとゆっくり鳴いて、アゴを出した私を笑うように聞こえる小憎らしさもありますが、私は汗にまみれてへたばる、涼風吹く、コマドリ鳴く、この時がたまらなく好きです。

生来非力ですが、せめて好きなコマドリが鳴く高さ迄登る体力を、いつまでも持ち続けていたいと思います。



これが“クロジ”と教えられても、それまで殆んど関心のなかった野鳥であるから、初めて聞く名前だけでなく、既に何度も耳にしていた筈の囀りもまた新しいもので、ただただ黙って、それでも熱心に説明を聞いていたのは30年以上前のことである。

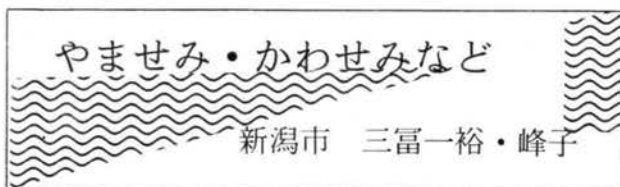
途中で偶々追いついたU先生は、鳥を訪ねて山に来られたのだが、此方はその頃、専ら高い所を歩きながら花を見るくらいがせいぜいで、足の早さだけを気にしていたので、初めは同行する気など全くなかった。

子供達の学校の校長さんで鳥好きと知っており面識もあったが、何となく近付きにくくてその折の出会いが初対面と同じであった。それが何時か先生のペースに引かれてしまい、予定を変更してよろしくご指導をお願いするようになった。その結果は“クロジ”だけが辛うじて判るまでに3年かかり、その間の摸索、迷い等の失敗が、今も続けている野鳥との付き合いに必要な何かを身につけてくれた。

今は誰もが便利に活用している録音器など勿論なく、カメラ・図鑑・双眼鏡すら充分でなかった時代であるから、次にそれを確かめ、或いは聞くには、同じ時期に再度そこを訪ねるはかなかった。片仮名と線で声の長短、上げ下げをメモしながら、到底再現の及ばぬことを知り、何度も投げ出しかけた。

種類の少い山の鳥なら覚え易いだろうと独り決めしたのだが、季節・環境・距離等との組み合わせに気づかず、初めはどうしようもなかった。そのうち何となく他の鳥と区別できるようになってからの進みかたは、思いもよらず早く、捨てられぬ楽しみになってきた。

この辺では標高1500m以上としていたクロジが、実際はそれより500m余り低い戸隠・笹ヶ峰でも充分聞かれると知ったのは、ずっと後のことである。



私共夫婦と、当時小学校5年生の娘三人で初めて参加させていただきました。S.63年春の、県支部総会・探鳥会の時でした。全くの素人、鳥に関しては知識完無の私達も、探鳥前夜の勉強会・懇親会で得た、若干の知識と特に妻は、同郷で、小・中学校の同期生であられる、事務局長、石部 久先生のご影響か翌朝に、やませみを見る夢を、ふくらませておりました。

妻と娘二人は、先頭グループでしたので、どうやらその夢は、適えられたようです。以来、その後毎月届く会報“野鳥”には、やませみの写真が載っていたせいとか、真先に目を通しております。

妻の一番好きな鳥、やませみは、とうとう私は見る事が出来ませんでした。探鳥も、これで終り、という時でした。私のいた橋の下から突然、何と表現のしようもない美しさ、持っていた野鳥の本に載っている、その飛姿

と全く同じ、いや、自然の姿、まさに翡翠色一瞬我を忘れ、得も言われぬ感動におそわれ以来、虜になってしまいました。

チッチッ と鳴く、チッチー と鳴きながら飛ぶ、かわせみ、川蝉は、翡翠と書いて、かわせみと読む。翡翠と書いて、ヒスイと読む。止り木や川石に、休む姿からは想像もつかない背羽の色、その後よく行く小出町の仕事の折りに、この場所へ足を運びます。

自宅近くの公園で観たオオルリの一番、薄茶色に、白い大きめの斑点模様のある、こずんぐりとした、かわいいメス、美しい瑠璃色のオス。

弥彦野鳥の森で出合ったサンコウチョウの木から木へ移る飛姿、昨夏、妻と二人で探鳥した、清里でのアカゲラの大群。

妻のやませみ、私のかわせみ、もし、かなう事なら、もう1つの同種、ヒュル-----と鳴く、あのアカショウビンを、見てみたいと願っております。

コウライウグイス

新潟市 伊藤泰夫

1985年8月の韓国慶州。国宝天馬塚古墳の見学の帰り、近くの松の粗林を通りかかるとだしぬけにやわらかい口笛のような鳴声と共にオリーブ色のムクドリよりやや大きめの鳥が樹々の間をとんだ。数羽いるようだがすぐ樹冠の茂みの中にかくれてしまう。結構活発にとびまわるのだが双眼鏡になかなか入ってこない。警戒心が強く見づらい鳥だがコウライウグイスのようだ。図鑑のように黄色でなくオリーブ緑色の個体ばかり、雌か幼鳥かも知れない。私はソウルの生れ、彼の地に小学一年まで育ったので高麗の名を冠したこの鳥には以前から関心があった。今初めて出会って高麗の国に来たのだと実感が湧いて来た。日本では舩倉島でないと見れないとか。いつか弥彦の山中で下手なウグイスのように

鳴いていたのがそれではないかなどと先輩に聞いていたが本場で見れたのは幸運だった。しかし思い出してみるとそれらしい出会いが過去に一度はあった。ある年の春新潟市の保安林で中型淡黄色の鳥がとぶのをチラと見た。はっとしたがすぐ日本にはあんな鳥はいないはず、かご抜けのインコだろうと一人合点して追わなかったのだが後でもしやコウライウグイスが迷って来たのではと気づいた。不思議なものでそう考え始めるとますますあの黄色い鳥がそれらしく思えてくる。今思い出すと残念でならない。やはり努力しなければワンチャンスはものに出来ぬと悟った。それにしても近頃コウライウグイス他いろんな野鳥が愛好家向けに大量に輸入されていると聞く。これらが逃げたり野に捨てられたりしたら我国の鳥相はどうなっていくのだろう。自然の動きでない人為による変化は防ぐ方法はないものだろうか。

慶州の公園にはホオジロハクセキレイの群もいて盛んに採餌していた。過眼線のない白い顔が印象的だったが、コウライウグイスに気をとられているうちに時間となった。やっぱり今度は探鳥専門で来ようと思いつつ連れを追いかけた。

“幸せ運ぶ”コウノトリ

味方村 木下 徹

バードウォッチャーにとって、その時々思い出の鳥というのはいるものである。私もはばかりながらその内の一人として心に残る鳥の1つにコウノトリがある。

私が初めてコウノトリと出合ったのは1987年1月25日佐潟に行った時のこと、前年の暮に西山町に渡来しているという話を聞き1度は見に行きたいと思っていたところ、佐潟にも来ているというので「それならば!!」と図鑑でしか見たことのない珍鳥を是非1目と出かけた時のことでした。観察小屋に車を止め

歩き始めて約1時間、目指すその鳥は上佐潟にいました。フィールドスコープに入ったその姿は、まるで天使がこの世に降りて来たかと思われるほどに眩く、飛んだ姿は限りなく優雅で気品があり、次列風切の銀色に光るあの美しさは他にたとえようのない天女の羽衣をまとっているかのように目に写ったのでした。

その年は私にとってすばらしい幸運な年であり、春に結婚、暮にはコウノトリが運んで来たのであろうか娘が誕生したのです。コウノトリが赤ちゃんを運んでくるというのは童話の中の話とと思っていましたが、このタイミングのよさにはビックリするやううれしいやらで天に舞うような気持ちでした。

あれからもう3年が過ぎ、娘も今年から保育園に行くことになりました。庭のエサ台に娘と一緒にエサをやりながら、まだ話してもわかるはずのない鳥の名前を教え、あと何年すると一緒に鳥を見に行けるだろうか、この娘が大人になって子供を産む時にまたコウノトリが来るのだろうか、あれこれ期待している駆け出しのとうちゃんである。

アオバトとの出会い

新潟市 伊藤定市

長男に誘われ野鳥の会に入会して間もない頃、初めて参加した一泊探鳥会が山の相川でした。(S.53年5月)

鳥の姿・声・名前、すべて一からという私の白紙のような頭に強烈にインプットされたのがアオバトの鳴声でした。姿こそ谷を隔てた遙かな尾根にシルエットしか見えませんでした、アーオーアーオーという裏声のような響きは、この世のものとは思えない不思議な印象として焼きついたのです。

以来、身近に見たいものと願いながら、なかなか機会に恵まれませんでした、ヒョットとしたことで出会いの感激を味わいました。

その一つは、長男と二人で新潟市の太夫浜へ行った時(S.59年5月)で、水田と松林の境に立つニセアカシヤの樹上でした。鳴声は聞けませんでした、姿は200ミリでカメラに収めました。(写真1)

その二つは昨年の6月、愛鳥センターさえずりの里でした。開所後たて続けに3回通って参加した探鳥会でした。

そして3回目は以外に早く訪れました。山の相川から6年目毎でしたから、この次は6年後と覚悟していたのに。

親友の渋谷道夫さんの奥さんから「見ない鳥がいるという電話があったから行って見て下さい」と連絡を受け、渋谷さんと隣り町の文京町へ行きました。なんと、玄関先の側溝に落ち込んで飛び立てないでいたのはアオバトの若鳥でした。早速保護して愛鳥センターへ届けました。(写真2)

新潟市内の海岸林では、何度か声を聞いており、ドバトに混じっていたという情報もあります。

最近、標識調査で海岸松林の鳥相が豊かことに驚きを新たにしております。身近な宝庫、ホームグラウンドとして、せっせと通い、何度でも会いたいものだと思います。



保護したアオバト (平2・10・27)

野鳥保護**シンポジウムに参加して**

保護部 渡辺範雄

上野駅に着いたのは8時31分、山手線で新宿へ社線に乗継いで参宮橋で下車した。11月17日のことである。地図と標識を頼りに会場であるオリンピック記念青少年総合センター入口にたどりついてほっとした。周辺は代々木の森につながって樹木が多い。研修館4F受付で申告し資料をもらう。名簿を目で追うと東京、千葉の人が多かった。第一分科会会場は角の教室で、静かに戸をあけ中に入る。前の席に場所をとった。空席はまばらだった。既に講義は始まっており、20分ほど遅刻したことになる。こうして午前、午後2人ずつ16時40分まで4人の講師の話を聴講した。講師の代る度に第二会場から来た人、移る人でざわめいたが、講義中は静かに傾聴していた。若い人もいたが年輩者が多かった。

上越の山本さんに案内状をもらったのであるが、講師の中に言語学者鈴木孝夫の名をみつけ是非この方の話を聞きたいと上京した。

ノートを取る傍ら2時間テープ3本に2日目のパネルディスカッションの分も録音した。

古くなったレコーダーなので音が悪くその後聞くことをしないでいる。第一会場の講義で感動したのは鈴木教授と研究センター長樋口さんのものだった。鈴木教授の話が聴講者に一番人気があったように思った。物を大事にする、捨てられる調度品を再利用する話は並の学者らしからぬ一端をのぞかせてくれた。「この辺で愛鳥、自然観察の見直しが必要でないか。学者の中には目的のために自然の対象を駄目にしてしまうことが多く、研究行為も今の時期やめてくれといたい。」或は普通の人がまさかそんなことは自然破壊、鳥に悪影響を及ぼすとは思えぬ例を上げていた。

山中の道路は今では舗装され側溝が設けられる。この巨大なトラップは移動する動物の

死場所となる。側溝の害を説かれていた。無意味な自然破壊はしない。こういう考え方が吾々自身生活の中で当然と思っていることを改める必要がある。自然保護の予防的措置には教育が大切で、地球全体の環境に対して怒りをもてる人に育ててゆくことだといわれた。

よい講義を聴講できたことはありがたい。話の一部は新朝文庫—ことばの人間学—を読み返したら掲載されていた。

次に樋口所長は「自然科学からのアプローチ」と題し人と野鳥と自然の共生について提言していた。それは「自然の仕組みを理解するのに役立つ研究の概要を示したい。どんな形で環境に影響を与えているか、役立つものは何かを述べたい」とことわって、スライドによって森、草原の環境から鳥の種、数の調査結果を多くの例をとり解説してくれた。直観的にどんな森には鳥が多くすめるか分っても、具体的に示すものがないといけない。単に同調して自然破壊は反対だと叫ぶよりも、根気よく調査結果を積み重ね自然保護に役立つ資料を提供する行為の方が大切なことを教示してくれている。特定の鳥を保護する場合、タンチョウを例に説いていた。「何もしなければ分らない。どんな所に棲んで、そこはどんな環境なのか。これからどんな風に環境を変えてゆけばいいのか。自然科学の手法を使わなければ分らない。最後に各県支部で得た資料は死蔵しないで提供し発表してもらうことにより役立たせたいと思うと結ばれた。具体性のあるよい話を聞かせてもらった。

翌日は千駄ヶ谷駅向いの津田ホールが会場となった。立派な建物で会場としては申し分なかった。「日本野鳥の会も昭和10年の設立から56年の歳月を経、昭和45年に財団法人に11月2日で20周年となった。この節目を記念して今日のシンポジウムを行った」と川崎副会長は挨拶の中で述べていた。豊かな自然環境を保全するために、私自身も考えさせられた行事であったと痛感している。

支部の保護活動について

保護部

「日本野鳥の会は、野鳥を通して自然に親しみ、自然を守る運動を展開してゆく」(日本野鳥の会の理念) 団体です。「野の鳥を野に守ることは、ほかの生きものや、それらが生きる環境を守り、更に私たち人間が安らかに暮らせる環境をつくり出すことにもつながる」(同上) からです。そして今や会員3万人を超えて、日本野鳥の会はわが国最大の自然保護団体になっていることはご承知の通りです。

保護部を設置して

日本野鳥の会新潟県支部は、それまでうやむやな存在だったのを、'78年4月に再建設されました。支部規約には、その目的に、「野生鳥類の知識と保護思想の函養普及を通じ、会員相互の親睦融和をはかる」とあります。この目的を達成する事業として、

①調査研究 ②探鳥会 ③生息地を守るための運動 ④県内各団体との交流 ⑤その他必要な事項 とあります。しかし、設立後10年程はこれといった保護活動はしませんでした。

'80年代後半から県内でもブナ林の伐採や、方々でゴルフ場・スキー場・リゾート域の開発が計画されて、問題視されるようになりました。'88年4月の総会で、保護部の設置とその活動方針が提案されて承認されました。

調査にもとずいて

日本野鳥の会(本部)も、国内の保護問題や国際的な協力関係に対処するため、'86年10月に保護部を新設して、全国レベルの問題について運動を展開してきています。また'88年に研究センターを設立し、自然保護に直接役立つ調査活動を通して、保護運動の裏付けとなる科学的データを蓄積するための独自の調査を実施しています。

県内における野鳥保護の問題は、まず支部として取り組んでゆき、できれば他の関係団体とも手を組んで大きな力とし、本部の協力を得るようにすることです。時にはマスコミ

を利用して世論に訴えることも必要です。

ところで野鳥保護は、その生息地を保全することが重要な一面です。最近目白押しに進められている様々な開発によって、野鳥の生息地が減少してゆくことは確実です。しかし、開発に反対だと言っても、そこにどんな鳥がどの程度生息しているかを調べたデータを持っているのといないのでは、発言の重みと説得力が違います。そこで支部としては保護部の提案にもとずいて、'89年度よりまず開発や伐採が計画されて問題化している所から調査を進めることにし、'89年から巻機山、'90年から菅名岳の調査に着手しました。(巻機山は'90年に終了) 更に新潟の太夫浜については'91年度よりオオタカを中心に調査する予定です。これらの地域はこれまで、公開されないアセス調査以外、本格的な鳥類の調査はなされていなかった所です。

日本野鳥の会の理念のもとに

私たちの支部は、単なる野鳥愛好団体とか趣味の団体であってはならないわけで、全国3万人の会員を擁する自然保護団体の地方組織です。県内にはいくつかの野鳥関係の団体がありますが、保護部を設け活動方針を持って動いているところは私たちの支部だけです。もっとも、会員の多くの方々はいくつかの団体にも加入しておられ、また役員となってそれぞれの団体の行き方に従って活動されている方もいます。それも結構なことで、各団体の発展を望むところです。一方私たちの支部は、日本野鳥の会の理念に基づいて、県内の他の野鳥団体と違った特色を持って、魅力ある活動を展開してゆくべきところであろうと考えます。

今後共ご理解とご協力をお願い致します。

(日本野鳥の会の理念-「野鳥」'90年3月号参照)

保護部員 大島基、小林成光、山本明
渡辺範雄 (文起—山本)

朝日池探鳥会および 研究発表会

朝日池探鳥会は、今年は晴天にめぐまれて参加者も例年より多く40名以上。カモ類は好天のため、池に殆んどいなかったが、オオハクチョウ17羽とヒシクイ、マガン合せて4～500羽入っていた。ヒシクイはそのうち池の中央付近に移動してきて、池の底からヒシの実を拾って食う様子をじっくり見せてくれた。マガンの中にカリガネの幼鳥が1羽混っていて、プロミナーで探して見られた方もいた。その他、カンムリカイツムリ、オオバン、ダイサギ、アオサギ、カモ類若干など。ワシタカ類では、オジロワシは現われなかったが、チョウゲンボウがカラスを追って池の上空を飛んだり、ハヤブサが鉄塔にとまっていたり、ノスリが現われたり、結構さまざまな鳥を見ることができた。〔写真—ヒシの実を食うヒシクイ〕

研究発表会（第4回）は、同日午後1時から上越市のリージョンプラザ会議室で行われ、50人近く集まって満席の状態だった。

〔特別発表〕イソシギの婚姻形態について
上越教育大学教授 中村登流

'84年から長野県の梓川でのイソシギの繁殖生態の研究から、この鳥が一夫一妻だけでなく、一夫多妻や一妻多夫のケースが少なからずあって、多様な婚姻形態を持っていることを、調査の経過を含めてご発表。

〔一般発表〕

- ◆上越市富岡地区のアオサギのコロニーについて
山本 明・陶山紀宏
発見されたコロニーの森、営巣状況、親



鳥の給餌行動その他をスライドで、また発見以来3ヶ年の巣立ち数を報告。また上越教育大4年の陶山氏は、卒論でこのアオサギの繁殖生態を研究し、特に交尾行動をくわしく観察され、番外交尾（E.P.C）については注目される発表であった。

- ◆六日町におけるツバメの繁殖生態について
木下 弘・内田康夫

木下氏より六日町のツバメについて、20年近く調査研究されて来た結果を、表やグラフにしてスライドで発表された。特に足環をつけた親鳥やヒナが、翌年以降どのような戻り方や番い相手の組み方をするかなど興味深いものがあった。

駿台大学教授の内田氏はツバメの権威者、六日町の調査データから、週平均最高気温と初卵日との関係をグラフで示し、この気温が15℃になると、春子の場合初卵が見られることを結論づけて発表された。

〔スライド発表〕

- ◆高田平野の珍鳥・稀鳥について 古川弘
氏がこれまでに会ったこの種の鳥を美しいスライドで紹介、この中には本県初記録となった貴重なものも。

- ◆雪国を生きるハクチョウの生態 石部久
本県に渡ってくるハクチョウの生態を、新潟平野の美しい風景や生きものと共に構成した氏得意の二連スライド。音楽にナレータ入りのテープと連動で写し出される画面は、動画のような迫力と楽しさがあった。
(文・写真 山本 明)

発行	1991年3月31日	No.31
発行人	大島 基	編集者 山本 明
事務局	日本野鳥の会新潟県支部	
	〒950-21 新潟市五十嵐西15番38号	
	☎025-261-1416	石部 久 〈振替・新潟1-6002〉